

蘭人ファン・ドールン氏銅像の建立と 仙石工學博士

工學博士 那 波 光 雄

仙石博士が晩年に臨んで、蘭人技師ファン・ドールン氏の銅像を猪苗代湖畔に建設された事は、一般世間に知られてゐる事業であるが、然しそれこそ國際的に奥床しい、而して博士の人情美に満ちた事業である。

仙石博士は獨自の費用で銅像建設を發起したのであるが、事業の關係上から東京電燈株式會社と共に主催となつてゐる。

銅像は猪苗代湖畔十六橋附近に建設され、博士の死に先づ事十六日の十月十四日を以て除幕式を舉行された。元より博士は既に病篤かりし爲め臨席は出来なかつたが、和蘭公使を初めとし、朝野の紳士多數參列して盛會であつた。

因にファン・ドールン氏の日本に於ける事績に關し主催者は次の如く紹介された。

ファン・ドールン先生略記

Cornelis Johannes Van Doorn

コルネリス・ヨハンネス・ファン・ドールン先生は、明治の初年政府の招聘を受けて來朝した和蘭の土木技師であります。日本に於ける先生の事業は土木局の工師長として河川の改修、港灣の修築等に關し、土木治水の計畫を樹て、又これを實行する事であります。明治五年の來朝から同十三年の歸國まで九年間、その間の先生は數人の技師工人を本國より招致し、又器械等を取寄せ、正に文字通り南船北馬の生活で、親しく利根川、淀川、信濃川等の改修、大阪灣、松島灣等の築港の指揮監督に任し、其足跡の及ぶ處實に東北より山陰の廣きに亘り、審かに本邦重要河川港灣の治水計畫に關する設計建白を提出されたのであります。

當時我國は維新の大業成つて日尙ほ残く、百度未だ備らざる時代で、殊に治水の術の如きは當路の人と雖もその方法の一端をも知らず、徒らに舊慣を墨守してゐるに過ぎないと言ふ有様であります。この時に當つて先生が身を以て範を天下に示した前記

の諸工事、並に折に觸れて政府に提出された諸種の調査書、指導書は實に長夜の夢を破つたもので、本邦治水事業はこれによりその迷蒙時代より一躍新文明の光を浴びるに至つたのであります。即ち先生は本邦治水事業の父といふも過言でなく、その歸國に際し、政府が先生の爲めに勲四等旭日小綬章の授與を奏請したのはこの功績を認めたのに他ならないであります。

今回その湖畔に先生の銅像が建設されるに至つた猪苗代湖は、明治九年先生が當時の内務卿大久保利通の命を受けその水を安積地方一帯の原野に引く設計を立てたことにより、先生と因縁誠に淺からざる處であります。現在の安積疎水は則ち先生のこの設計に基いて開鑿されたもので、政府は此處に東北を始め數縣の失職士族を移し、懇田耕作の事に當らしむる事により、政治上の暗雲を一掃し得たと云はれてあります。

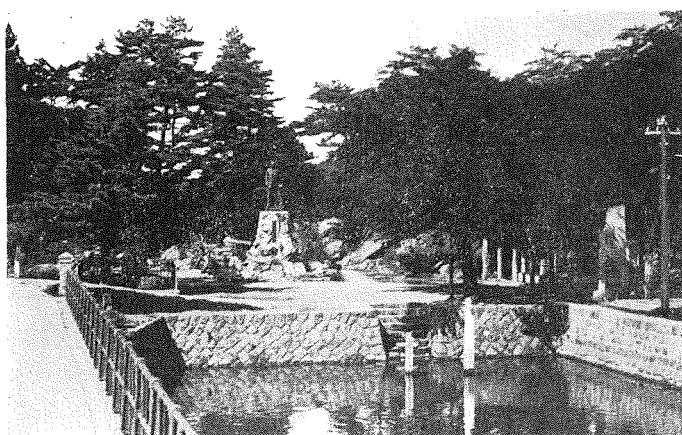
先生は深く日本を愛し、その關係した事業に於ては常に國家百年の計を樹て、永きに亘つて我國の爲に計ることを忘れませんでした。この安積疎水の設計踏査に當つても、猪苗代湖より流れる日橋川の水量が殆ど一定せるを見て、將來必ずその用ふることはあるべきを思ひ、永くその水位観測を行ふべきことを命じて置かれました。我國電氣事業界に長距離高壓送電の劃期的大事業となつた猪苗代水力電氣は實に先生のこの命による水位観測の記録があつた爲で、これが今日東京電氣株式會社によつて繼承され、數百萬の人口に電燈電力を供給しつゝある猪苗代大電線となつてゐるのであります。

先生は1837年(天保八年)和蘭ハルに生れ、1906年(明治三十九年)同國アムステルダムに歿するまで、その七十年の生涯を事業を友として終始されました。先生は遂に結婚しなかつたので、先生の遺風を後代に傳ふるものは、雲烟萬里を距てたる東洋、この日本國の山間に建てられた一基の銅像のみとなつてしまふかも知れません。明治初年百政改革の秋に當り

政府の招勧を受けて來朝し、政治、法律、教育等夫々改新の任に當つた外國人は數多く、夫々開化の恩人としてその名を世に謳はれてゐる所であります。唯我がファン・ドールン先生のみは、その事蹟が餘りに素朴なる土木事業であつた爲、殆んどその名を知る者もないと云つてよい位であります。しかしな

がら光輝餘りに眩しきものは物を育む力に乏しい、ファン・ドールン先生の事業の如きものこそ、その恩澤百世に及ぶものとして、却て永く記念されなければならぬのであります。我等有志相計つて今回その銅像を建立するに至つたのも、即ちこの點に於ける微意を表した爲に外ならないのであります。

ファン・ドールン氏肖像



猪苗代湖畔 フアン・ドールン氏の銅像